

PA-3

現代日本語の自然会話における母音の非語彙的な延伸の位置と切れ続き： 形容詞の強調の場合

韓咬池（京都大学大学院）

要旨

現実の自然会話では、非語彙的な理由により、標準的な発話音声から逸脱した形で母音が伸びることがある。母音の非語彙的な延伸は、生起状況・生起位置・頻度が様々である（韓 2020）。本発表は特に強度強調による母音の延伸の生起位置について規則性を見出そうとするものである。

『日本語日常会話コーパス（CEJC）』の実例を観察した韓（2023：130）は、形容詞において強調の母音の延伸が生起する位置は、活用形により左右される傾向が見られると述べる。本発表は、母音の延伸の位置に対する統語環境の影響を観察する。『CEJC』の調査において、強調の母音の延伸を含む語の統語的な前後環境を具体化し、延伸の語内位置との関連性を観察する。

観察の結果、強調による母音の延伸の位置は、活用形そのものではなく、統語環境、特に後部要素により、生起傾向が変わることが確認された。文の切れ続きにより、語末延伸が許容されるかが決定され、文末（引用文末を含む）でのみ語末延伸が許容される。一方、後部要素が後続する場合、語頭延伸の許容度が大きく上がり、（名詞後続以外には）語頭延伸が優勢になる。

1. はじめに

現実の自然会話では、非語彙的な理由により「すごーい」「かーわいい」などと、標準的な発話音声から逸脱した形で母音が伸びることがある（以下、母音の非語彙的な延伸）。母音の非語彙的な延伸は、「強調」「ためらう」「考えながら話す」「身体の動きによる」「相手との発話タイミングを調整する」といった多様な事情で現れることが確認されており、また、その生起位置や頻度も様々である（韓 2020）。しかし、それらの多様さから秩序を見出すことは不可能ではない。この発表は、特に強度強調（語の表す意味の程度が強められること。斎藤 2006）による母音の延伸の生起位置について規則性を見出そうとするものである。

強度強調の母音の延伸が特定の位置に現れやすいという指摘は既にあるが、それらは内省や作例に基づいている（郡 1989、松本 1998）。松本（1998）は、一語発話、連体形、終止形における母音の延伸の生起傾向を述べたが、その他統語的な要因に関する考察はなかった。活用形が母音の延伸の生起位置を左右することは、『日本語日常会話コーパス（CEJC）』の分析に基づいた韓（2023：130）も述べている。具体的には、連用形・連体形は語頭～語中の順で伸びやすく、終止形は語中～語頭の順で伸びやすく連用形・連体形に比べて語末延伸が許容される傾向があると言う。ただ、コーパスの分類上、イ音便化された連用形が連体形に分類されたり、また連用・連体形と終止形で傾向が区別される原因の把握には至らなかつたりするなど、追加研究の余地を残していた。

本発表は、母音の延伸の位置に対する統語的な環境の影響を明らかにする(1)。これは、活用形と統語環境の結びつきに着目したものであり、活用形による延伸の生起傾向の原因を探る一環でもある(1c-d)。『CEJC』の調査において、延伸を含む調査対象語の統語的な前後環境(以下、前部要素、後部要素)を具体化し、延伸の語内位置(語頭・語中・語末)との関連性を観察する。

- (1) a. 強調による母音の延伸の生起位置に対する、前部要素の影響
- b. 強調による母音の延伸の生起位置に対する、後部要素の影響
- c. 連用・連体形の語頭延伸の優勢をもたらす環境は、修飾かひとまとまりの語句の後続か
- d. 終止形の語中延伸の優勢及び語末延伸の許容をもたらす環境は、述部か、文末か。

2. 研究対象及び手法

研究資料の収集・観察には、国立国語研究所の『CEJC』を用いた(小磯ほか 2023)。200時間分の映像・音声データ、転記テキスト(形態論情報付き)、検索ツールなどを提供するため、調査対象となる実例の特定及び実例における発話状況の把握が容易である。研究の流れを(2)に示す。

(2) コーパスからの実例検索

- 重複結果の除外 → 1回延伸の標準的な語彙・語形に限定
- 観察開始 → 強度強調か否かの状況判断 & 問題を含む例の除外
- 強度強調の例に対して前後の統語環境を記録
- 統語環境の分析が困難な例の除外
- データ分析

実例はコーパスの検索ツール「Himawari 1.7.1」より「非語彙的な母音の引き伸ばしタグ(:)」で検索して収集した。容易な分析のために、強調の状況と相性のよい「形容詞」に品詞を絞り、発話者の出身地は「東京都」及び県全般的に東京と同様なアクセント型を有し地理的に近い「群馬、神奈川、静岡」に限定して、アクセント型を一定範囲に収めて音韻の影響を減らした(秋永 2014。巻頭の金田一春彦作図による「アクセント分布図」より)。検索の詳細を表1に示す。

表1. 母音の延伸の実例検索の詳細

検索意図	検索条件	検索内容
母音の非語彙的な延伸	S書字形 ¹ (タグ付)	:
強調の容易な把握	S品詞	形容詞-一般
アクセント型の限定 安定した音韻パターン	出身地	東京都、群馬県、 神奈川県、静岡県

¹ 書字形: 同じ語形に所属するものとして表記の変異を区別したもの(『CEJC』ホームページより)

検索の結果、重複を除き、1039件がヒットした²。さらに、容易な観察のために、延伸の回数は1回に制限し、標準的ではない語彙・語形（基本語形から音の融合・脱落・挿入があった場合、文語、俗語、方言など）を除いた。同様の理由で、活用形も、語彙素からモーラ数が変わらない「連体形-一般」「連用形-一般」「終止形-一般」のみを残した³。

調査対象として残った824件の実例を映像付きで観察した。この過程で、音声確認不可の例、転記テキストと発表者間の意見が一致しない例を除外した。結果的に、757例が状況判断の調査対象となった。状況判断の際に注目した要素の一部を（3）に示す。

(3) 音声：発声、音調、声量、発音、時間的要素（発話速度、ポーズ）

映像：表情、動き（頭、手、胴体、位置移動）

文脈：発話者の前後発話内容、対話参加者の前後発話内容、笑い、反復

強度強調だと思われる（強度強調以外の可能性がほぼ考えられない）例は515件であった。強度強調以外の状況としては、卓立強調、考え（形式の思い出し、内容の思い出し、統語構成）、身体の動き（大きな動き、笑い、筆記、朗読）、ためらい、発話タイミング、質問・疑問、語句末、発話末などがありうるが、現在のところ、その全種類、状況間の上下関係、体系や分類などについては精査できていない。

強度強調の例に対して、延伸を含む語の前後要素の有無といった統語環境を記録し、実例に基づき活用形の再分類も行った。特に後部要素については、（1c-d）を参照し、延伸の位置は後部要素との関わりに影響されるという仮定の下、より詳細に記した。なお、前後要素において、引用・反復・言い誤り・変更・倒置・補足などを特記し、自然発話の多様性に対応した。容易な分析のために、漠然とした発話境界、言い誤りやその修正といった文の安定性を失ったものなどは除外しており、その過程で引用以外の特記事項を含む例や活用形が見分けられない例も除外した。表2に、調査対象として残った421件の実例に見られた前部要素と後部要素を示す。

表2. 統語環境調査対象である実例の前後要素の分類

前部要素		後部要素
0（なし）、 <引用>、 1（あり）	強調の 母音の延伸を伴う 形容詞	0、<引用>、終助詞、判定詞、じゃん、から、 連用被修飾語、て、ない、 名詞、の：準体助詞、まま

* <引用>は、引用文前後の境界を指す。

* 連用被修飾語は、連用形で修飾される形容詞、形容動詞、動詞、副詞などを含む。

* の：準体助詞は、「んだ」などの「ん」を含む。

² 「す:ご:い」のように複数回伸びる場合、延伸の回数分だけ同じ結果が重複して現れる。

³ 転記テキストに従った活用形の表記である。

3. 結果：文の切れ続き及び後部要素で分かれる延伸の生起パターン

強度強調による母音の延伸を伴う形容詞の実例421件の前部要素と延伸の語内位置の数を表3に示す。表における「語中or語頭」は、延伸部が語末の長音でかつ音の高低に変化がないため、位置の把握が難しい場合である⁴。語末長音の延伸のうち、位置の特定が可能で（延伸後、最終モーラの音が明らかに聞こえたり、音が下がったりする場合）、且つ転記テキストと延伸の位置が異なる場合、発表者が延伸の位置に修正を施してある。

表3. 調査対象語の前部要素と延伸の語内位置の数

語内位置 前部要素	語頭	語中	語中or語末	語末	合計
0	100	180	29	8	317
1	55	41	3	2	101
<引用>		3			3
合計	155	224	32	10	421

まず、前部要素の影響を観察する。前部要素がない場合、母音の延伸の生起頻度は、語中~語頭~語末の順に多い。前部要素がある場合、語頭延伸の数が語中を超える。これは一見、前部要素がある場合、語頭延伸の許容度が上昇または語中延伸の許容度が下降するように見える。

しかし、後部要素を取り入れたより具体的な統語環境における件数（表4）を見ると正確な事情が見えてくる。これは黄色で示した前部要素を伴う文末の語中延伸の件数が、100件以上大幅に減った影響である。実際に、黄色以外に緑で示した、前部要素が0の場合と1の場合における、語頭と語中延伸の数を比べると、前部要素が1になっても、全体の比率に影響するほど、語頭延伸が目立って多くなってはいない。

表4. 調査対象語の前後要素と延伸の語内位置の数

前部要素 語内位置 後部要素	0				1				<引用>	合計
	語頭	語中	語中or語末	語末	語頭	語中	語中or語末	語末	語中	
0	26	164	28	7	5	11	2	1	1	245
<引用>	1	1		1		5	1	1	2	12
終助詞	25	4			4					33
判定詞	6	1								7
じゃん	1	1	1							3
連用被修飾語	28	3			34	10				74
て	3	2								5
ない	2				1					3
から	1									1
名詞	6	4			6	12				28
の：準体助詞	1				4	3				8
まま					1					1
合計	100	180	29	8	55	41	3	2	3	421

⁴ 「語中or語頭」の多くの場合は、語中延伸であろうと仮定している（韓 2023）。

加えて次の事情により、強調による母音の延伸の位置に対する、前部要素の影響はほぼないと考えられる。後部要素ごとに0と1の場合を比べると、前部要素に関係なく、(名詞以外には)一般的に特定の語内位置の優勢が保たれている。同数を成すことはあっても、前部要素の有無が変わることで、優劣が覆されることはない。以上を踏まえて、以下の表5は、前部要素の有無を問わずに、後部要素と延伸の語内位置の関係のみを示している。

表5. 調査対象語の後部要素と延伸の語内位置の数

語内位置 後部要素	語頭	語中	語中or語末	語末	合計
0	31	176	30	8	245
<引用>	1	8	1	2	12
終助詞	29	4			33
判定詞	6	1			7
じゃん	1	1	1		3
から	1				1
連用被修飾語	62	13			74
て	3	2			5
ない	3				3
名詞	12	16			28
の：準体助詞	5	3			8
まま	1				1
合計	155	224	32	10	421

表5'. 調査対象語の後部要素と延伸の語内位置の数 (東京都話者)

語内位置 後部要素	語頭	語中	語中or語末	語末	合計
0	16	130	21	6	173
<引用>	1	6	1	1	9
終助詞	18	2			20
判定詞	5	1			6
じゃん	1		1		2
連用被修飾語	34	7			41
て	3	1			4
ない	3				3
名詞	6	13			19
の：準体助詞	3	2			5
合計	90	162	23	7	282

表5と表5'において、緑色は後部要素ごとに最も優勢な延伸の位置を、黄色は語末延伸を示したものである。二つの表の色付けを比べると、東京話者のみの結果と、東京・群馬・神奈川・静岡

話者の結果に変わりがない。このことから、後部要素による延伸の位置の様相が、東京都のみではなく、同アクセント型を有する複数の県に渡る一般的な傾向である可能性が示唆される。

後部要素ごとの詳細な傾向を観察する。まず、黄色の語末延伸が許容されるのは、0と<引用>で、文の切れ目である。文内の引用節とその続きの間には、文の境界と同様に振る舞う統語的な切れ目があり、強調の延伸はそれを反映する。主文と引用文だと捉えれば、文末とも言えよう。

一方、語末延伸が見られない残りの場合は、後部要素に内容語・機能語を問わず、同一文⁵の要素として何か後続するという共通点がある。この場合、ほとんど語頭延伸が優勢である。ただ、後部要素が名詞の場合のみ、語中延伸が優勢であるが、割合としては語頭延伸も比較的少くない。後部要素がある場合、基本的には語頭延伸が優勢で、名詞後続の場合のみ語中延伸がやや優勢だとまとめられそうである。

以上の結果から、後部要素は三つのグループに分けられる。語頭と語中の同数、及び1件のみの結果を除けば、以下のとおりである。語末延伸許容+語中~語頭優勢のIグループ(0、<引用>)と、語末延伸が見られない二つのグループ、語頭~語中優勢のIIグループ(終助詞、判定詞、連用被修飾語、て、ない、の：準体助詞)、語中~語頭優勢のIIIグループ(名詞)である。

グループ分けから、強調による母音の延伸の位置を決めるのは、活用形ではなく、統語的な環境(特に後部要素)であることが分かる。IIグループには終止形、連用形、連体形が混ざっており、語末延伸許容グループとそうでないグループを分けるのは、文の切れ続きであるためである。

なお、母音の延伸は、母音の時間長が伸びるという発話レベルの音声現象だが、発話レベルで後部要素が存在する<引用>(「と、って」など)は、後部要素が存在するII・IIIグループではなく、後部要素がないIグループと同様な傾向を見せる。これは母音の延伸の生起パターンが発話レベルの環境ではなく、統語レベルの環境に基づいた現象である可能性を示唆する。ただ、引用文の末尾とその後部要素の「と、って」などの間に、発話レベルでも深い切れ目が存在する可能性もあるため、この問題については、今後精査が必要である⁶。

(1c)の「連用・連体形の語頭延伸の優勢をもたらす環境は、修飾かひとまとまりの語句の後続か」については、語頭延伸優勢の要因は、ひとまとまりの語句の後続だと考えられる。IIグループに修飾関係と言いがたい「終助詞、判定詞、て」が含まれているためである。

(1d)の「終止形の語中延伸の優勢及び語末延伸の許容をもたらす環境は、述部か、文末か」については、文末が要因だと考えられる。述部に位置する「終助詞、判定詞(、じゃん)」が後続する場合、語末延伸は見られず、語頭延伸が優勢になるためである。また、語中延伸が優勢になり語末延伸が許容されるのは、文末・文の切れ目に位置するIグループであるためである。

⁵ 引用文と引用文を含む文を一文と見なす場合、同一節。

⁶ 一方、韓(2023)の発表の際に、日本語母語話者の方々より、後部要素がある場合、語末よりは語頭や語中延伸の方が自然と発音しやすいという意見をいただいた。これは延伸の位置が発話レベルの環境に依存する可能性を示すものである。

4. おわりに

以上、強調による母音の延伸の生起位置に対する、統語構造の影響について、『CEJC』の実例を用いて観察し、以下の7つの結果を示した。

- (4) a. 前部要素の有無は、延伸の位置に大きな影響を与えない可能性が高い。
- b. 文の切れる位置（引用境界に文の切れ目があると捉えた場合）で、同一文中の後部要素がない場合のみ、語末延伸の許容度が上がる。
- c. 一方、後部要素がある場合、語頭延伸が優勢になる。ただ、名詞の場合、語頭延伸の許容度が上がる程度で、語中延伸が語頭延伸よりやや優勢である。
- d. 強調による母音の延伸は、発話レベルの前後環境ではなく、統語レベルの前後環境と関わっている可能性が高い。
- e. 強調の母音の延伸の生起傾向は、活用形ではなく、統語的な環境に起因する。
- f. 強調の母音の延伸の生起傾向は、修飾や述部の問題ではなく、文の切れ続きの問題である。
- g. 以上の結果は東京都という特定の地域でのみの現象ではなく、東京都と同様なアクセント型を有する地域全般に見られる傾向である可能性が高い。

本研究では、基本的な語彙・語形・統語環境のみを分析対象にしたため、自然発話で豊かに現れた言語に関する考察を一部省略した。今後の研究では、自然発話における多様な言語の現れを考察対象に取り入れたり、品詞や発話者の出身地を拡張させたりして、現代日本語における強調発話の規則性に対する分析を一層精緻にすすめていく予定である。

<参考文献>

- 秋永一枝 (編) (2014) 『新明解日本語アクセント辞典 第2版』金田一春彦 (監修) 東京：三省堂。
- 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2023) 「『日本語日常会話コーパス』設計と特徴」『国立国語研究所論集』24：153-168.
- 郡史郎 (1989) 「強調とイントネーション」杉藤美代子 (編) 『日本語の音声・音韻 (上)』, 講座日本語と日本語教育第2巻. 316-342. 東京：明治書院。
- 国立国語研究所 「日本語日常会話コーパス | 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」 <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc.html> [2023年6月アクセス].
- 斎藤純男 (2006) 『日本語音声学入門【改訂版】』東京：三省堂。
- 韓旼池 (2020) 「現代日本語の母音の非語彙的な延伸が生起する状況について—実例における身体の動きに注目した考察—」修士論文, 京都大学。
- (2023) 「逸脱した発話音声のパターンとその要因について —現代日本語における強調の母音の延伸を中心に—」日本認知科学会 (編) 『日本認知科学会第40回大会発表論文集』. 127-130. 北海道：日本認知科学会。
- 松本恵美子 (1998) 「強調表現の位置と効果についての覚え書き—現代日本語の形容詞の場合—」『言語科学論集』4：55-68.